

令和4年度 秋田県生涯学習センター 第2回運営委員会 記録

期日：令和5年1月26日（木）  
時間：午後1時30分から午後3時まで  
会場：県生涯学習センター4階視聴覚室

1 開会

2 所長あいさつ

- ・新年になって大分経った。皆様は今年をどのような年にしたいとお考えだろうか。私は、うさぎ年だけに、地域の方がウェルビーイングになるように、そバニー（側に）寄り添う年にしたい。敷居が低く、親しまれる点やアウトリーチ型の取組を充実させていきたい。
- ・ハーバード大学のロバート・ウォールディング博士の研究では、何が私たちを幸せで健康にしてくれるのか、85年にわたって、3世代2024人の参加者を調査研究したそうだ。一般的な幸福とは、富や名声や業績と思われがちだが、それは社会的成功であって、本人にとっての幸福ではないようだ。
- ・ロバート博士の研究の結論は、「私たちを幸福・健康、つまりウェルビーイングにしてくれるのは、良い人間関係に尽きる」ということだった。ほかにも、全ての年齢層、性別、民族において、強い社会的なつながりは長生きの確率上昇と関連していること、また、幸せな人間関係を育てることで、加齢による身体的な痛みを軽減することなどがわかったそうだ。改めて、「つながりづくり」の重要な意義を確認できた。
- ・結びに、皆様より頂戴したご意見は、運営等に生かしている。このあと、今年度の具体的な事業や施設利用に関して職員から説明させていただく。どうか、お気軽にご意見やご助言、ご質問をお願いする。皆様との対話が新たな気づきにつながることを願い挨拶とする。

3 出席者紹介及び資料確認

- ・別紙資料参照

4 委員長・副委員長あいさつ

委員長

昨年、社会教育主事講習があり無事終えられた。ひとえに生涯学習センターの皆様方の御尽力の賜かと思う。来年度、秋田大学で受けることになるが、とてもここまでのことができるとは思わないが、引き続きご協力の程よろしく願います。生涯学習センターの運営に資することができるような協議ができればと思っている。

副委員長

本日の天候は荒れていて、テレビでは渋滞が続いていた。ふと、センターでテント張りや防災の学習をしたことを思い出した。もしかしたら、テレビの方たちもこういう経験を積んでいたら、何か車の中に積む物もあるのだろうかと思って拝見した。所長から、幸福には人に出会うということがあるとお話をいただいたが、小畑勇二郎さんは心豊かな人が幸せになっていることを、生涯教育を立ち上げたときに伝えている。センターの立ち位置が私たち住民にとって少しでも役に立てるように、私たちもがんばりたい。

5 案件

(1) 今年度事業の実施状況について

①総務班長

- ・貸館については、12月現在、前年と比較して人数、件数ともに若干だが、増加した。  
(R4 12月末 1,009件 17,801人 R3 12月末 968件 15,275人)
- ・「事業等」の箇所も若干増えている。  
(R4 12月末 27,998人 R3 12月末 26,617人)

事業内容は次のとおり。

- (1) 学習相談・ホール利用他)
  - (2) あきたスマートカレッジ
  - (3) その他主催事業
  - (4) 諸室
- ・「新型コロナウイルス感染防止対策等」の研修室等の利用定員について、9月から講堂と第2研修室は緩和をしている。講堂は面積で余裕があること、第2研修室は、パソコンを使用する方が同じ向きに座り、隣との間についてを設置することで飛沫を防げるということと、室内で移動することがあまりない部屋であることから、緩和に踏み切った。その他の部屋については、現状では感染者が減っていない状況が続いていたので、緩和には至っていない。今後の国や県、使用状況を見ながら検討していくことになるかと思うが、現時点ではこのとおりの定員で運営を行っている。
  - ・稼働率について、貸室8室の全て合わせた平均は46.1%で、昨年度より8.5%の増加をみた。
  - ・資料3については、12月までの利用件数で45,799人の施設の利用がある。令和2、3年がコロナ禍という状況で、令和元年の数字には遠く及ばないが、ここ3年間の中では最も多い利用数が見込まれる予定である。前年の同時期に比べると増加している。

## ②学習事業班長 障害者の生涯学習について

- ・障害者の生涯学習の取組はたくさん行っており、今日はその一部を抜粋して紹介する。調査・研修・講座はスパイラルに絡ませながら現代的課題を中心に取り組んでいる。この障害者の生涯学習の学習プログラムの開発は、第1回調査研究委員会で、市町村と協力して進めていきたいと説明した。
- ・市町村で学習プログラムをつくることは、何をやるのかから始まって、どこにお知らせして、講師を探して実施してなど、高いハードルがある。我々が企画や実施のお手伝いをし、市町村にはどこにお知らせをするのか周知を中心にやっていただきたいと伝えたところ、仙北市がこの事業に手を上げた。
- ・仙北市には県立大曲特別支援学校せんぼく校があって、そこの卒業生を中心にやっているスクールがあった。そこで、一般の方も募集する形でスポーツ講座を企画した。センター職員も講師を務め、参加者はバドミントン、バスケット、卓球バレーを楽しんでいた。耳が遠いという地域のおばあさんも来て、市町村の職員と一緒にサポートをして楽しんでいた。はじめはルールが分からない状況だったが、みんな笑顔で楽しんでやっていて、その様子は市の広報にも載せていただいた。我々の講座の知見を発揮できた講座だったのではないかと考えている。
- ・また、仙北市の障害福祉サービス事業所とも協働し防災講座を開催した。施設職員の方が個々にサポートをし、我々は講座の説明を中心にするというように、上手く連携プレーができたと感じている。ビニール袋でご飯を炊く活動をした。お米とか親子丼とかカレーとかのり玉とか必要な物をあきた With という企業の方から講座のために出資していただいた。参加者は嬉しそうに食べてくれた。講座が終わった後に、事業所の方からわざわざ感想を言いに来てくれ話を聞いたところ、すごく好評で、「また何かこういう講座をやりたい」「また企画してくれないか」といただき、この声を大切に話を進めている状況である。
- ・みんなの思いイウベ・キクベは、障害のある方ない方が話し合う場を創りたいということで、第1回運営委員会時に紹介させていただいた。

## <動画視聴>

- ・動画の中で「学びの場を作る」という表現が数回出てきたが、どんな学びの場かという、ただ話す場である。けれども、楽しそうに話しているのが動画だと良く分かっていただけたかと思う。このような機会を創っていくことが大切なのだと感じさせられた。
- ・アルクベ・イウベ・キクベは実際に車椅子で街を歩き、それをみんなで「どんな街になったらいいのか」と話し合っ、て、「体験+話し合う場」という形で企画した。「ランチをし

ましょう」などのミッションカードを持って街に出てください。裏には車椅子の使い方を載せた。車椅子の使い方は私たちが説明するのではなく、必要なとき・困ったときに活用できるようにした。

#### <動画視聴>

- ・まとめた言葉は実体験ならではの言葉ではないかと思う。車椅子使用者に、「こんな言葉掛けをされるといい」「こんな介助してあげるといい」と説明したところで、実感が伴っていないとどの場面で声掛けしたらいいかわからない。今回体験した人たちは、実感したことをグループで伝え合い、相談し、自分たちなりの言葉でたくさん表してくれた。一つひとつの言葉が重くて感動した。「見た目よりも大事な物がある」という言葉は、「山王の街並みは綺麗だけれども、車椅子で歩くとガタガタで大変だった」という実体験からだった。「知ること体験したことは何とか伝えたいし継続していきたい」という言葉も印象的だった。
- ・体験を伴った活動、それを受けた話し合いでいいイベントができたと思っている。今度はこれにたくさんの人を入れて、秋田駅前のようにたくさんの人がいるところでやってみよう。
- ・今年度のボッチャ交流大会は、エントリーが12チームと増え、講堂でコート2面を作り、数多くの試合ができるように実施した。コートは専用でなくとも作ることができることが示せた。交流が目的なので、ルールをオープンにしたり審判も我々が務めたりするなどみんな楽しんでるように工夫した。けれども、ボールの距離を測定する場面もあり、すさまじい戦いが繰り広げられた。
- ・その他に広がりということで紹介すると、私が全国特別支援教育研究部門合同研究集会で、障害者の生涯学習の取組について発表する機会をいただいた。他県からも秋田県の取組がすごいと問合せがきて嬉しく感じた。この発表をみた栗田支援学校の研究主任の先生が、「ぜひ自分たちの研究でもこういうことをやっていきたいのでと相談させてくれないか」と、研究の相談を受けることもあった。
- ・近代美術館では、「障害のある方も楽しめるような事業やアイデアを企画したい」と担当者の相談を受け、「職員でどのようにしたらみんなが楽しめる美術館になるだろう」というテーマで熟議を行ったらと助言しファシリテーターのお手伝いをした。
- ・国立教育政策研究所社会教育実践研究センターの社研の窓という番組で秋田県の取組を紹介した。
- ・私たちができることを一つひとつやっていく中で広がりも見せてきて大変嬉しいと思っている。

#### ③学習事業班 職員A 家庭教育支援指導者等研修について

- ・本研修は、保護者が安心して家庭教育を行うことができるように家庭教育支援チームの核となる「リーダー」及び家庭教育を支援する地域人材となる「サポーター」の養成を目指すことが趣旨となっている。
- ・各研修後、参加者にアンケートを実施しているが、結果からは「とても有意義だった」「支援する上で必要なスキルについて学ぶことができた」「保護者との関わりについて手がかりになった」「他の市町村の家庭教育支援について情報交換できた」と満足度の高さが伺える回答をいただいた。
- ・同じようにアンケートから「有意義な研修であるため、同じチームのたくさんのメンバーに参加させたい。そのためハイブリッド型の研修ができないか」というような意見があった。次年度には研修の開催方法について考慮していきたいと考えている。

#### ④学習事業班 職員B 生涯学習・社会教育関係者研修及び研究大会について

- ・本研修は、生涯学習・社会教育関係者が、現代的課題解決へアプローチできるよう、令和2年度から継続して「障害者の生涯学習」「防災」の内容を重視して実施している。

- ・研修は、研修名称のとおり、それぞれの立場に合わせた研修内容としており、今年度は、生涯学習課から移行した第1回地域学校協働活動推進員・地域連携担当教職員等研修も、推進員や教職員向けを踏まえて、体験的な活動や演習、協議を取り入れながら実施した。
- ・参加者アンケートでは、回答数が少ないながらも、「参考になった」「大いに満足した」と答えた参加者が、新任職員研98%、推進員研、市町村研、公民館研100%と、いずれの研修でも好評を得ることができた。
- ・また、生涯学習・社会教育研究大会では、地域の協働体制の実質化及び、そのつながりを担う人材の育成を図れるように、対面型とオンライン配信を兼ねたハイブリッド型で実施した。また、今年度は社会教育士や社会教育主事有資格者も参加対象に加え、有資格者は数人ではあったが参加した。参加者数は来所者65名、配信視聴者72名、計137名と多数の参加を得ることができた。
- ・アンケート結果から、地域において、社会教育を基盤とした、人づくり・つながりづくり・地域づくりの好循環を図っていく必要性と、地域をつなぐ関係者が主体的にネットワークを生み出していく重要性を認識した記述が多数見られた。こちらも満足度は98.3%と好評を得た。
- ・次に、研修の学びがどう地域還元されているかについてだが、その検証方法は様々あるかと思う。その中の一つの見方として、各市町村の今年度の広報誌から市民講座として実施されているのかどうかを調べた。
- ・分かったことは、多くの市町村が昨年度と同様の講座を今年度の同じ月の講座に採用して実施していることが分かり、研修内容の活用の難しさがうかがえた。
- ・しかし、北秋田市では今年度森吉公民館で防災講座を新設し実施した事例や、にかほ市で家庭教育支援チームが子育て世代向け防災講座を実施した事例がある。
- ・森吉公民館の講座は、施設職員が一昨年度の本研修に参加し啓発され、今年度講師を務めた及川真一氏を2回講師に迎えて実施した実績がある。住民への声かけ方法、公民館の備品確認等を学び、9名の参加者が災害時のリーダーになれる準備を進めていると聞いた。
- ・にかほ市では、家庭教育支援チームで防災講座を開きたいという声を市町村職員が拾って連携しながら実施したと聞いた。
- ・北秋田市、にかほ市ともに、市町村職員が施設職員やボランティア員を活用して、協働しながら講座をリニューアルして当研修を活用している。ぜひこの地域還元の仕方を紹介していきたい。
- ・また、いくつかの市町村では、当研修には参加していない状況で、障害者の生涯学習や防災についての事業推進をしていきたいという要望があることを認識している。
- ・より多くの市町村や関係者にこの研修の意義や重要性を理解していただけるよう、生涯学習課や教育事務所、また、生涯学習奨励員協議会等共催している4団体と、具体的な連携のあり方を共に考えていきたい。具体的に現在各担当者と検討していることとしては、年度末に事業実績を話し合う会や役員会等で、当研修について関係者に早期に伝え、それぞれの事業や来年度計画に加えていただけるように運ぶことを検討している。
- ・好評を得ている当研修をさらに周知していただき、学校を核とした地域づくりに役立ててもらえるよう、これまでと同様研修の内容を吟味し工夫しながら、一つひとつ連携・協働を進めていきたい。

## (2) 来年度の主な事業計画について

### ○副所長

- ・現在、来年度の各事業について年間行事予定を作成している。当センターの3つの機能の一つである調査を通じて、出た課題や県民が何を求めているのかなどを取り入れながら、県民の要望に応えられるような事業を企画・実施していきたい。学習事業班長の説明でもあったとおり、障害をもっている方の生涯学習、防災には今まで以上に力を入れていく。さらに、所長のあいさつにあった、人とのつながり、緩やかなネットワークづくりを重視しながら、より充実した事業を展開できるように努力していきたい。これからも様々な意見等をいただければ反映させて参りたい。

(3) 質疑応答

A委員：講堂の利用人数は100人で募集すると窮屈なところもあるので、もう少し緩やかに（定員を）増やしてほしい。

総務班長：現在、講堂の定員の緩和を望む声もあり、利用人数制限について所内の検討を重ねているが、昨夏すぎにコロナの感染の急増があったため、緩和を見送った経緯がある。国において、（感染分類の）5類への移行を検討しているようなので、その動向と周辺施設等の定員の設定等の様子を見ながら、通常の利用人数制限に近づけていきたい。また、利用者にも、感染症対策を求めたい。

A委員：利用者側も感染対策に努めるので、緩和をお願いしたい。

B委員：大学においても厳しかったが、今年度の講義から全ての規制は撤廃されて、普通の定員で授業はできるようになってきている。学生のように若い方と高齢の方や障害のある方とは事情は違うかと思うので、対象者に合わせたあり方を考えられるかもしれない。熟議のようにみんなで話し合うものとそうでないものとを分けることも可能であると思う。飲食を伴うものも再開されているので、工夫していただければと思う。

C委員：関連して、11ページの報告を見ると137名中、来所者よりも視聴者の方が多いが、研修の参加者割合において、来所者よりも配信者の方が多いように見受けられる。そもそも定員がこうだからと言ったのか、そうでないならば、配信であれば参加したいという方も多くて、ハイブリッド型を拡大していただければと思った。

B委員：ハイブリッド型の研修においては、配信したものをオンライン参加者は聞いているだけなのか、それともZOOMなどで何らかの討論をできるようなあり方なのか。

職員B：ハイブリッド型研修の協議では、オンライン参加者同士での話し合いができるように実施した。質問をするということは難しくできなかったが、話し合うことができ大変有意義であったとの声をいただいている。

学習事業班長：研修の中身に応じて、配信であったり、直接集まったりであるとか形態は考慮している。新任職員研修は、配信のみにしている。4月が始まって忙しい時期で、社会教育の基礎を学んでほしい方にタイムリーにお届けしないといけないところがあるので、来ていただくよりも、聞いていただくことを重視して配信の形をとった。熟議のファシリテーターなど、どうしてもライブで伝えたい、その感覚を味わってほしいと思うと、配信はなしにしている。研究大会のように、基調講演等はぜひ聞いてほしいとなると、対面の他に配信も使ってという形になる。配信だと参加しやすいという声もたくさんある。以前は、配信だと準備が大変ということもあったが、聞いてくださる方もスキルが上がってきたので、研修に合わせた形でやっていければと思っている。

副所長：個人的な考えだが、私も、今年・昨年とオンラインの会議に何回か参加したが、現地に行かなくても事足りると思った。しかし、やはりその会場に行って人と会って顔を合わせる部分もほしいなと思うのは、会議の種類によって分かれると思う。会議で言いたいことを伝達するだけならオンラインでよいが、人と会って実際にという部分については、どうしても我々もゼロにはしたくないところである。オンラインでも対面でもどちらもできる時代になったので、受け取る側の気持ちのバランスというのが、より大切なのかなとは思っている。

職員C：あきたスマートカレッジでは、東大史料編纂所協力講座において、講師リモートによる講座を今年度開催した。なかなか秋田では聞くことのできない先生方のお話を秋田にいなが聞くことができるという、リモート方式をそういった場面でも活用することができた。受講者は、当センターに集ってもらい、講師が東京にいて、そこをつなぐという方法をとっている。その場合では、受講者から講師の先生に質問をして、答えていただくという双方向も実現している。尚、こういった実績をふまえて、来年度は、人気ある講座で定員を超えそうな講座については、当センターの中で第2会場を設けた上で、講堂での様子を第2会場に配信して、より多くの方に御参加いただけるような工夫も考えている。

B 委員：可能性の広がるところもあるだろうし、逆にやりにくいところもあると思う。私が参加した広島教育学会では、シンポジストの中に、オンラインで参加する人と対面で参加する人が混じって質問するなど、こうなるとかなり大変な運営が必要になる。ハウリングなどいろいろなことがあり、大変な運営であったみたいだ。工夫していただければと思う。

D 委員：今のことにに関してだが、研究大会に私も自宅から参加させていただいた。二ツ井にサテライト会場があったが、そこまで30分かけて行かなくてもリモートで参加することができる利点があり、そちらを選んだ。お話も内容も素晴らしく、とても良かった。その後、4～5人でオンラインの中で話し合う機会を設けていただいた。その方たちは初めて会う方たちだったが、次回どこかでお会いしたときに、「あの時お話ししましたね」という挨拶ができればと思った。

あきたスマートカレッジについて、今年度私も何回か参加させていただいたが、中央から講師がなかなか来にくいという場合は先ほどのようなことができるだろうし、市民おもしろ塾というのを私はやっているが、仙台から若い歌人を講師として呼びたかったが、コロナで来られないということがあった。そのとき、参加者は会場に集まって、ハイブリッド的な形で質問も受け付けるという方式をとった。まさに、生涯学習センターのことを参考にさせていただいた。

B 委員：状況に応じて使っていただければと思う。旅費や宿泊費も支払わなくてよくなるので、財政的にもよい。ただ、講師の方としては、秋田の食や自然を楽しみたいと思っていったりもするので、なかなか難しいところもある。

E 委員：防災の研修について。私も自分の会社において、防災関係の取組を行っている。大変だと思っていることは、毎年周りの環境も変わっていくので、研修の中身であったり、定められているルールであったりを逐一見直ししていくことが大事であると思っている。研修というと、年に何回かのスケジュールになると思うが、「いざ、訓練」といったときに、意外と動けなかったりする。実際に起きうるであろう可能性を想定しながら、頻度高く研修を積み重ねていくのが、とても大事なポイントであると思っている。センターもそのように計画されていると思うが、そういったところに注意しながら、回を重ねていただけると、とても良いのかなと思う。

来年度の計画策定について。一つの考え方としては、日々の積み重ねから計画を立てると思う。例えば2030年、こういう姿でありたいといったような逆から考える、私たちは“バックキャスト”といっているが、そういった考えで、5年後にこうなっているためには今何をしていかなければならないのか逆算的な考え方で、街づくりのことであったりとか県民の生涯学習に関する考え方をこうしたいだとか、事業であったり取組の計画を策定されるのも一つだと思う。

学習事業班長：防災に関しては、「訓練的な防災」という考え方と、「教育」としての観点があると捉えている。当センターは「教育」として取り扱う防災である。身近なところで楽しみながら体験して学ぶことによって、日常と非日常の境目のない“フェーズフリー”という考え方を広めていくことに取り組んでいる。楽しむということは継続してできることであり、1回だけ頑張っても仕方がない。日常生活に取り入れられる考え方であり、我々職員も実践することでいろいろなアイデアも生まれ、研修のネタとしてはたくさん出てきている状況にある。

私たちも、計画を逆算的に立てるということを実践することで、この方向に向かっていく。現代的課題を考えるときに、今困っていることだけを見ても、なかなか捉えきれない。「障害者の生涯学習」はまさにその典型で、大きい目標を掲げて一步一步進んでいる状況にある。我々は、30年後という話をよくするのだが、逆算の視点は大切だと思っており進んできたが、そうやって進んできたことを改めて思い起こしていただいてありがたかった。その気持ちを忘れずにがんばっていききたい。

所長：今の長期的な視点について。私の思いで話してしまうことがあるが、「障害者の生涯学習」ということで取り組んで、職員や周りの企業さんや特別支援学校の生徒、卒業生、生涯学習奨励員の方々と、いろいろ巻き込んでやってきている。あきたWithの代表

をされている企業の代表の方とお話の中で、今は「障害者」といつているけれども、いずれは介護と障害の区別がなくなって同じになっていくのではないかという話題になり、そういう話を聞いているうちに、秋田県に障害者は今どれぐらいいるのかと思い調べてみた。知的障害・身体障害・精神障害で数えると、重複者もいるが、令和元年度の数値で約9万人弱いる。また、その家族を最低1人としても、秋田県の人口の2割くらいになることが分かった。それが介護も含めると、県人口の何割になるのだろうと考える。そういう方たちの居場所であったり、働き場所であったりを考えると、少しでも力を入れていけばと思っている。アイディアがあったら、運営委員の皆様からも遠慮なくいただければありがたい。

B委員：特別支援学校の修了生だけではなく、全体に広がるといった意味では、ユニバーサルデザインのように、障害者だけに限定されたものではないイメージをもっと押し出した方がよいのかもしれない。

逆算してという話で思ったことについて。今、高校の再編整備の委員長を務めているが、10年後、中学3年生の人数が3～4割減ってしまうことを前提に高校の統廃合を考えている。縮小・再編でどんどんなくなっていくとういことで、どうしても暗い話になってしまう。そういう現状があったとしても、できるだけ子どもたちの学びをより充実させるためには、どうあるべきなのか、今後の時代にどう対応していくべきなのかという、夢を語る側面がなくなると、いよいよみんな秋田からいなくなってしまう。社会教育も含めて、10年後の人口構成や地域の問題も含めて、現実をふまえてどう展望を切り拓いていくのか、生活の質を維持していくのか、何か夢を描けるようなものを持つていく必要があるのではないかと、聞いていて思った。

自治体で昨年度と同様の講座が多く、なかなか広がらないという件について。大仙市ではどうか。

F委員：本日皆様に配付している「大仙アカデミー」というちらしを御覧いただいている。今年度から大仙市で行っているもので、大仙市にゆかりのある経済界や各界のトップの方々を講師に招いて、年2～3回で講演会を行うという企画である。2月18日は、トヨタグループのシンクタンクであるコンボン研究所所長様がいらして、SDGsや今後のトレンドを活用した今後の地域創生のデザインについて分かりやすく説明していただく予定。大仙市で行うものだが、秋田県内の皆様に来ていただきたいと思っている。皆さん、SNSなどで周知してほしい。

「障害者の生涯学習」のことだが、今年度行われた「アルクベ・イウベ・キクベ」が街歩きイベントと一緒にしているのを素晴らしいと思った。共生社会の実現という難しい課題に対して、分かりやすく、楽しく、見せているというのにとっても感動した。今年度は、調査で仙北市さんと、ということだったが、来年度もこういった形で続けるのか、それともまた違う形で行うものか。

学習事業班長：来年度も継続してやっていく予定。今年も、2市町村程度と広報をかけたのだが、手を挙げたのが仙北市だけだった。まだ枠はある。

F委員：先ほど、「障害者の生涯学習」について打ち合わせする機会があり、まずは何ができるか、何を調べるべきかなど、どこから始めるかが難しいという話になっていた。まずは、オフサイトミーティングから始めたいと思っていて、今この話を聞いて相談させていただきたいと思った。

C委員：仙北市の話聞いて、（手を挙げたのが）1つだったのだなと思った。是非、10市町村ぐらいの中から今年度は2つと選べるように積極的に関わってもらえたらいいなと思いながら話を聞いていた。とても良い取組であるし、「障害者の生涯学習」の中でスポーツを取り入れるときに、どのように他の健常者の方も一緒にできるのかということや自分たちの中でもどう取り入れていけるのかということをおも考えていきたいと思った。

生涯学習センターで行っていることの市町村への広まりということについてだが、確かに市の公民館などの事業では変化がないかもしれないが、私たち利用者が、おそらく自分の団体等において、かなり広げさせてもらっていると思う。私の場合であると、数

年前にファシリテーター養成講座に参加して、そこから熟議を何度も行った。「障害者の生涯学習」における卓球バレーとボッチャに関して、町内会にも来ていただいて広げることができた。教えていただいた情報をもとに、12月24日も、障害者スポーツ協会から借りて、地域の方とボッチャと卓球バレーをすることができた。もっと新しいことをやるには、センターに来て勉強すればいろいろなことを学べると思っている人がたくさんいると思うので、これからはいろいろな学びを提供していただけたらと思う。

また、先ほどのハイブリッド型研修の件について。実際に会うことはとても良いことだが、私も先ほどのD委員が言われたように、グループ分けされた協議にも参加したことがある。「センターに来るには、少しハードルが高い」と思っているような人たちが参加できるというメリットが絶対にあるため、そのような意味でもハイブリッド型研修はあった方がよいと思う。あとは、このようなやり方もあるのだということはどうぞん広めていってほしい。そうした意味も含めて、可能なときはハイブリッド型研修を取り入れてもらえたらと思う。

学習事業班長：事業効果の市町村への波及について。私の感覚的には、言われているよりは波及効果はもっとあると思っている。障害者スポーツを行ったとき、県の障害者スポーツ協会の担当者から、「協会で行っていることと似たようなことをやるのではないか」という話はあったが、「対象は違うので」ということでお願いした。終わった後に「今まで頼まれたことのない団体からかなり頼まれるようになった、非常に忙しくなった。」と言っていた。研修の防災講座の講師の方も、いろいろな団体や方々からお声がけをいただいて、鹿角から東成瀬からで大変だとの声があった。それぐらい中身が良いと、やりたいなと思って動いてくれる方がいるのだと思っている。おそらく、我々が把握していない部分でもそういうことがあると思う。私が、“その講師を紹介する人”みたいになってしまった部分もある。それから、電話がかかってくる、具現化できないまでも、「来年度このようなことをやりたのだが、どのようにやればよいのか」という相談も市町村の方から結構きている。どうしたらよいかと相談の電話がくることは、嬉しいことだなと思って丁寧に対応している。すぐには効果が出ないかもしれないが、2年ぐらいおいて芽が出るということもあるので、我々も丁寧に種蒔きはしていきたいと思う。

ハイブリッド型研修については、全部をできたら良いということもあるが、会場にいるスタッフと配信用にけるスタッフと、ということで相当数が必要になる。適当に行えば人数は少なく済むのだが、私も様々な場所で発表させてもらう機会があり、ZOOMと両方配信するといったときに、ZOOMの配信と会場とのリンクに不具合が生じた場合、私の話していることと画面にタイムラグがあるなど、いろいろな辛い目にあってきている。それからすると、当センターのスタッフにはそうしたタイムラグがなかったり、ちゃんと質問できるようにしていたりなど、日々研究を重ねていて、すごいなと思っている。そのために、機材の準備であったり、当日にブレイクアウトルームを作るのにもかなりのスタッフがいてグループ分けをしていたりなどするため、会場と配信とでどちらかだけであれば人数的には計算できるが、そうでないと難しい面も実はある。やるからには良いものを提供したいとの思いがある。会に応じた、中身とのバランスをとりながら、より良い研修になるように考えていければと思う。

C委員：高校生が参加した事業について聞きたい。自分たちが何か企画するときも若い人たちには参加してほしいと思っており、この事業のときは、それぞれの高校に直接連絡をしたのか、周知は全体に対してだけなのか、高校生を引き込む何か手立てがあったら教えてほしい。

所長：包み隠さず申し上げると、保護者の力を職員の中で借りている。娘さんが参加してくれる際に友達も連れてきたということ。それから、先ほどお話ししたあきたWithの代表の方の関係で、そこの社員の方の息子さんということもあった。あとは、私が高校の教員をしていたので、校長に電話をして何人かの参加協力を求め、一本釣りのような形でお願いした。本当は広く募集すれば良いのだろうが、そうしてしまうと、たくさん来られたときに対応ができない点もある。まずは、少しでも、そのような芽を広げていこうということで、最初としてはそのように行った。

C委員：参加した高校生にとってはとても良い学びになるであろうし、そういう若者がいることで私たちも学ぶことがたくさんあるので、広がっていけば良いと思う。

B委員：高校と連携協力のような組織的なつながりができると良いと思う。

G委員：いろいろな研修会などを行うときに、県北・県南・中央のようにして会場を3か所置いて、ハイブリッドで、中央で講師をする方が南や北の会場に集まった方々となつながらといったことがあり、各所で100人の方が入ると3倍の300人になるといった研修がよくあるので、そういったこともやられているのかなと思った。

それから、私もボッチャなどを見て、児童会館でも是非やってほしいと常々思っていて、前回の運営委員会のときもお願いしようと思っていたら、とても忙しそうに見えて、お願いしづらかった。次年度は、何とかお願いしたいと思っているので、前もって伝えておきたい。

現在、私たちは7年くらい、不登校の子どもたちと関わっている。昔であれば、子どもは成績でも何でも山型のような形で特別良いこと、特別できないこと、中間、のようなことがあったが、今は発達障害となると、どこがゾーンの切れ目というのがないところがある。今関わっている子どもたちの中でいうと、自主学习で1ページを埋めることに対して、発達障害のあるその子は、字を大きくしか書けないのに、先生に「わざと大きく書いてすぐ終わるためにやっているのだろう」と思われてしまって、怒られるそうだ。別の子においては、興味があることが決まっているため、いつも昨日やったことをまた今日もやるというような状況があり、先生からは「また同じことしかやってこない」と言われてしまう。そうやって怒られているうちに、不登校になっていくところがある。これを7年間ぐらいつき合ってくると、現在では25歳ぐらいになる子が、中学や高校のときはとても生きづらかったが、今はいろいろな年代の人と話すようになったら、とても気が楽になったというのを先ほどの「イウベ・キクベ」で聞いていたときに思い起こした。だから、中学生や高校生で同じ年代で生きづらいと思っていた子たちもきっと、いろいろな年代の人が参加した「イウベ・キクベ」に参加したら、「自分の考えていることって特別じゃないんだな、認めてくれるんだな」というような気持ちになるのかなと思った。何かあるとき、お声がけをいただければ、そのような子どもたちに是非参加させたいと思った。

学習事業班長：いつでも参るので、お声がけください。各地区に会場を置いてということについては、大きい会であれば、地区でサテライト会場を設けていただいたりすることで、自分ではできないけれど近くに行くことができるというような状況をできるだけ工夫して作りたいとは思っている。だが、これもなかなか手間がかかることなので、大きな会るときといった限定する形であったりする。オンライン会議システムは、比較的場所の制約がないので、地区にこだわらなくてもよいし、参加さえできればよい。それがオンラインの良さであり、生かしていきたい。

不登校の話題について。私の妻は養護教諭で、教室にいられない子の話を毎日聞いている。受け止めてくれる場所は、絶対に必要だと思う。不登校の子に限らず、障害のある子にしても、なかなか受け止められずにいるということもあつたりするので、話す場であつたり居場所だったり、少しでもそのような場所ができるように、我々もがんばっていきたいと思う。しかし、我々だけでそれはできないので、我々が行う居場所づくりなどを見て、自分の市町村でも作ってみようという形で、県内にポイントを増やしていければと思う。まずは、モデルとなって見せていければと思っている。

D委員：防災講座の講師の先生には、おもしろ塾でも昨年の7月に来てもらっている。能代・山本地区の生涯学習奨励員協議会で行った会にも来てもらっている。高校生の参加について、個人的な希望としては、企画・運営を彼等に担ってもらって、我々がそれをサポートするという形が良いのではないかとと思っている。実現できたらお知らせする。

「虹色」について。内容がたくさんで、はっきり分かるようになっている。その中で、「社会教育主事」と「社会教育士」についての記載があるが、私もかつては社会教育主事だったので、社会教育士を名乗ってよいのかと疑問に思った。社会教育主事だった方々を活用していく場面について、何か考えていることはあるか。

学習事業班長：私も、社会教育主事講習では講師を担当したが、社会教育士ではない。この会の参加者で、名乗ることができるのは、職員2人だけである。社会教育士として称するには、新しい講座をとらなければならない。個人としての資格になる。主事としては、職務の発令になるので、そこは大きな違いがある。私も名乗ることができないので、どうしたらよいかというところもある。

高校生の企画に関して。若い人達のパワーは素晴らしいと思っているし、高校生や大学生の力を活用していければと思っている。私としては、大学生に期待している。コロナ禍では、サークルとしての参加はできない状態だが、是非、大学生サークルを引っ張って来て、いろいろできたら良いと考えている。大学生が熟議を重ねて、いろいろやっていくというのはとても良いことだと思っている。ユースバルにおいては、かつて行われていた高校生の生徒会会議に我々も参画させていただいていたので、コロナ禍が収まり交流できるようになれば、その中で出たアイデアを実際にセンターで試してもらうといった連携ができたら良いと考えている。

B委員：各大学に生涯学習サークルのようなものができて、生涯学習センターで何か支援するようなことができると良いと思う。

職員C：6年前からか、秋田大学の社会教育主事の資格を取得するための授業を年15回、生涯学習センターの職員で担当させていただいている。昨年からは、私ともう一人の職員の2人で持っている。ちょうど今週の月曜日（1月30日）が、14回目これまで勉強してきた中身を一つの社会教育事業として、発表するということだった。毎年やっていることだが、若い人たちの発想というのが、我々では思いつかないような斬新なものが出てきて、実際それを載いて使ってしまうかと思いたくなるくらいである。ただ、授業中の成果であるので、それを勝手にセンターの事業に取り入れることは、慎重にしている。そういった実感を我々は持っているの、事業にうまく取り入れるようなことも考えていきたいと思っている。

B委員：学生のアイデアについては、学生本人に同意があれば、使っていただいて良いと思う。その学生も動員して、いろいろな企画に参加してもらうと広がっていった良いのではないか。

A委員：冒頭に講堂の人数制限の緩和をお願いしたばかりでしたけれども、私たち生涯学習奨励員協議会も、今年もまた、生涯学習センターと連携しながら現代的課題の中に取り込んでいただけるように、この場をお借りして改めてお願いしたいと思う。昨年の奨励員の発表大会に出た方たちの声は、本当に楽しく学ぶことができたということで、これからも1回といわずに、そういった学んだものが日常的に身に付くような形になるまで、できればさりげない形で、できれば良いと思っている。できるだけ私たちも市町村に戻って、それぞれが確認しながら広げていけるようにといった形の研修をしたいと思っている。

B委員：オンデマンド教材について。先ほどの動画は非常に素晴らしいものがあったので、あのような形で30分くらいの動画を作成して、その後に熟議とか体験活動をやると良いというパッケージのようなものを作り、社会教育主事がオンデマンドのものを使って気軽に講座などができるような状態にさせていただくと良いのではないかと考えた。実際に、生涯学習センターで実施したものを撮ってもよいと思うし、そのような専門家に話をしてもらった部分を撮っておいて、それを活用する形もあると思う。講師の方には、1回使用したら5,000円を払いますといったようにしたら良いのかもしれないが。

学習事業班長：実は、車中泊に関するその先生のキャンプ動画を作成し、YouTubeで公開し、それを見ていただいて車中泊に挑戦してもらうといった講座を昨年度実施したこともある。繰り返し見てもらえるので、需要としては可能性が高いと思っている。

B委員：そういったものがある程度蓄積されてくると、初級レベル、中級レベルのように段階分けしてできると素晴らしい。本当は、全国の生涯学習センターが連携していろいろな教材を蓄積していけると良いのではないかと考えた。

それから、熟議をやられて、社会教育主事の方々も様々なアイデアが出て、やる気が出るというのは、大きな効果だと思う。それを実際の現場に持ち帰って実施できるか

というところではないので、そこを含めた形でのフォローが重要だと思う。実際持ち帰ってやるためには、上司の同意も必要であるし、お金も必要であるし、他の部局の同意や協力も必要だったりするので、そういったところも含めて、面倒を見ていけるようなシステムがあると、もっと実現されていくのではないかと、聞きながら思った。

#### 6 所長あいさつ

- ・運営委員の皆様には、お忙しい中、貴重な御意見をいただきありがとうございます。
- ・敷居が低くと最初に話したが、忙しかったり大変そうに見えたりということで、申し訳ない。いつでも声をかけていただければと思っている。いつでも、どこでも、誰でも、が生涯学習の目指すところであり、そのような意味で、ある委員の方からお話のあったユニバーサルデザイン的なこと、皆様の中から出されたオンデマンドやハイブリッド型など、当センターには自信をもって紹介できるスタッフがたくさんいるので、チャレンジできることはチャレンジしていきたいと思う。バックキャストについては本当に大事なことだと思う。誰でも、みんなという意味でのバックキャストになるように、そばに寄り添ってまいりたい。
- ・生涯学習センターとしては、職員が一生懸命やってくれている。しかも、話にあったように、参加されている方が楽しいということは、実は職員も楽しんでいるので、そういった気持ちで今年もまたがんばって参りたい。今後ともよろしく願いたい。今日は、本当にありがとうございました。

#### 7 閉会